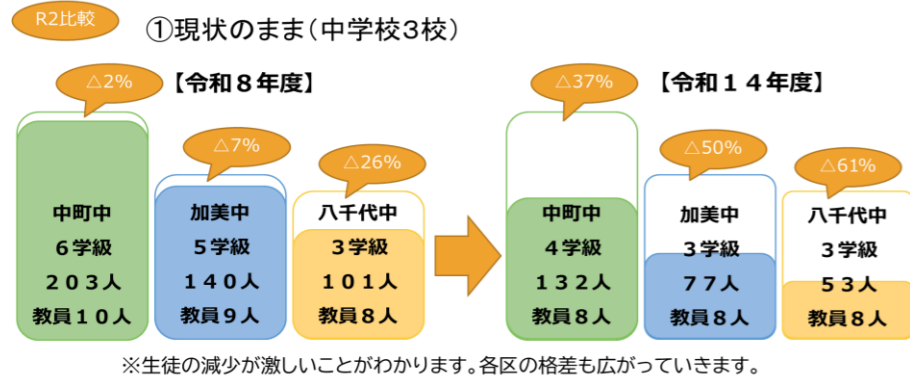
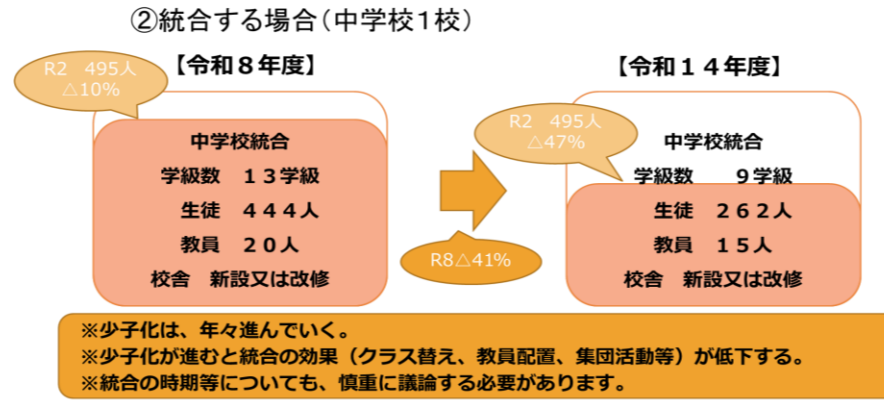


子どもたちにとって望ましい教育環境のモデル(中学校)



子どもたちにとって望ましい教育環境のモデル(中学校)



子どもたちにとって望ましい教育環境のモデル(中学校)

○令和2年1月～12月までの出生数(速報値)

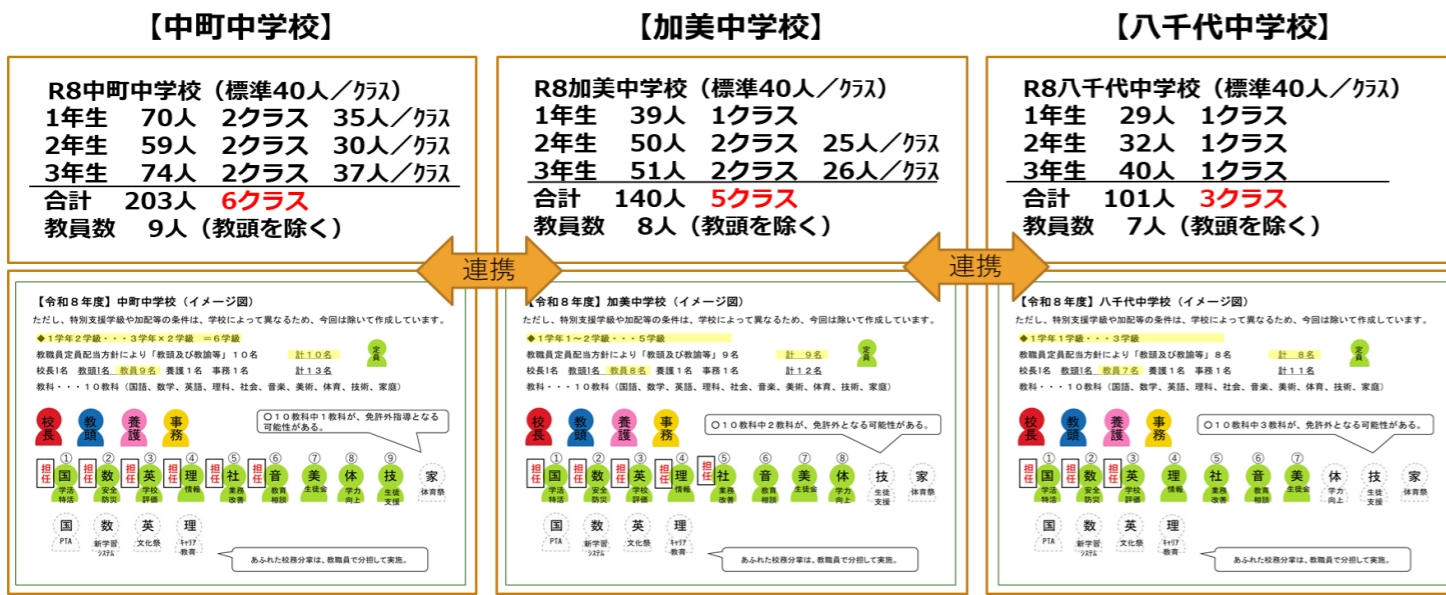
令和9年度 小学1年生、 令和15年度 中学1年生

	中南小	中北小	松井小	杉原谷小	八千代小	合計
小学校区	17人	15人	13人	11人	14人	70人
中学校区	中区 32人		加美区 24人		八千代区 14人	70人

- ①全ての学校で、単学級となる出生数。
  - ②各区ごとの統合でも、全ての区で単学級となる。
  - ③町全体でも2学級の編制。(小学校35人学級、中学校40人学級)
- ※3学級となるには、小学校は71人以上必要  
中学校は81人以上必要

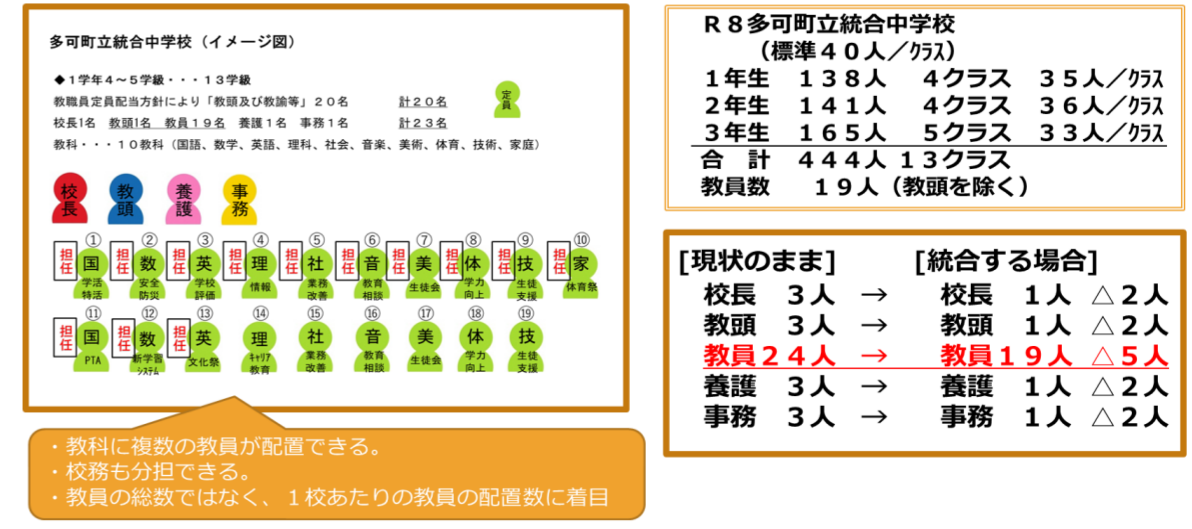
※学校間の移動は、原則できない。(県教委確認)  
 ※集団活動を合同で実施する場合、生徒の移動時間や教員の打ち合わせ時間や回数などが増える。  
 ※学校が離れているため、学校運営上、効率が良くない。  
 ※中学校同士の連携事例があまりない。

○現状のまま(統合しない)の場合



子どもたちにとって望ましい教育環境のモデル(中学校)

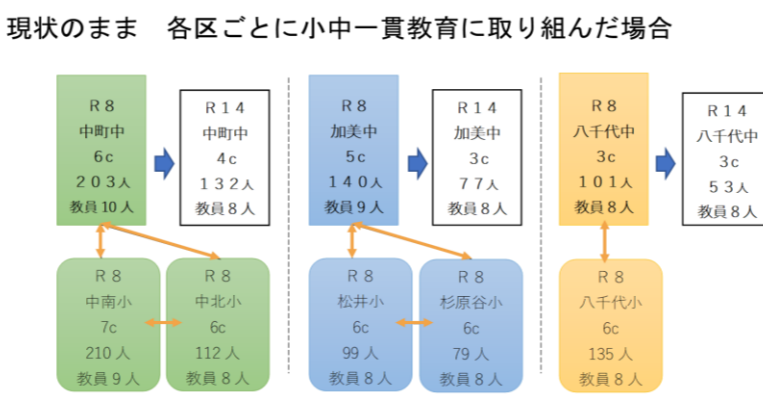
○統合する場合



子どもたちにとって望ましい教育環境のモデル(中学校)

- 【まとめ】今後について、ご意見や質問等をお願いします。
- ①小規模校のメリット(きめ細やかな指導)は、工夫次第で、適正・大規模校でも実現できるため、『統合する場合』のメリットにもなる。
  - ②適正・大規模校のメリット(集団活動、多様な価値観、社会性等)は、小規模校では実施できないため、『現状のままの場合』(統合しない場合)のデメリットになる。
  - ③『統合する場合』は、バス通学による時間的不利益が生じやすい。
  - ④学校運営上、教員の総数ではなく、1校あたりの教員数に着目する必要がある。

子どもたちにとって望ましい教育環境のモデル(小中一貫教育)



子どもたちにとって望ましい教育環境のモデル(小中一貫教育)

- 今後について、ご意見や質問等をお願いします。
- 改めて確認しておくこと
- ①区ごとの小中一貫教育は、小学校にとってはメリットがあるものの、中学校にとってのメリットはあまり見えてこない。
  - ②小中一貫教育の効果を発揮するためには、施設が隣接、もしくは一体型が望ましい。  
 ※全国の小中一貫教育のほとんどは施設一体型。施設分離型のケースもあるが、校舎間の距離は近い(500m~1000m程度)
  - ③地理的な条件等で統合できない場合、小規模な小・中学校の存続を考える上で、地域の協力を得ながら、小中一貫校を取り入れるケースがある。(養父市等)
  - ④小中一貫教育は、統合を推進するための施策ではなく、学校を残すための施策でもある。